いま、求められる地区社協活動

～これからも「つながり・支えあう」地域へ～

1 今こそ必要な地区社協

感染症の拡大を受け、社会全体を大きな不安が覆う中、人々が距離を取ることを求められた結果、多くの地域活動が休止となりました。直接会って顔をみて声をかける機会が少なくなることで、地域にある困りごとは見えづらくなり、発見が遅れ、深刻化するリスクも高まっています。

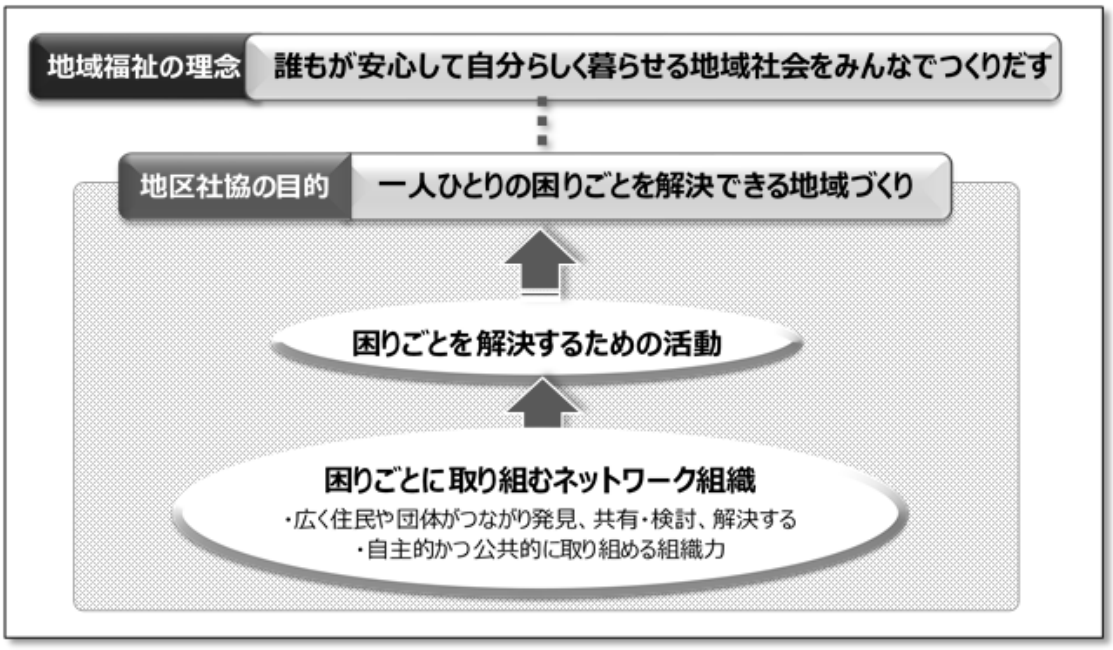
こんな時だからこそ、**ネットワーク組織である地区社協が、活動再開に悩む地域の活動を応援し、住民や団体をつないでいくこと**が求められています。

これまでも横浜の地区社協は、時代の変化や社会状況に応じて**「地区社協として今できること」**を常に考え、自由な発想と行動力で様々な活動に取り組んできました。

再び「一人ひとりの困りごとを解決できる地域づくり」に向けた一歩を踏み出すために、改めて地域を見つめなおし、皆さんが納得するまで話し合い、小さくてもできることは何かを、その地域ごとに決めていくことが大切です。

活動者の不安が大きい場合には、一人ひとりの不安や思いを丁寧に聞き、寄り添うことから始めるなど、まずは「自分たちの地域や暮らしについて話し合う」ことから始めてみましょう。

私たち市社協・区社協も、これからの地区社協活動を皆さんと一緒に考え、必要な取組を進めていきたいと考えています。

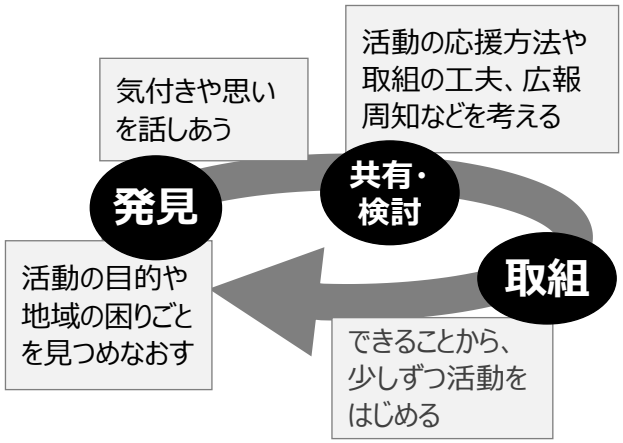


2 これからの地区社協活動

これからの活動のあり方を考えるとき、忘れてはならないのが、ネットワークを活かして対応・解決する視点です。

地域の現状に向き合いながら、身近な地域の困りごとに気づき、それを共有する場を持つことで、制度による支援や助け合いにつなげていくことが大切です。

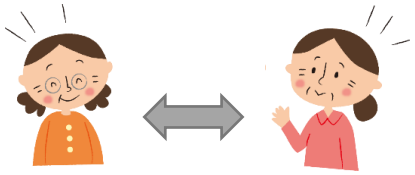
活動の状況が変わっても地区社協の強みであるネットワークを活かすことで対応・解決の糸口や様々な選択肢が見つかります。



まずは話し合いから

地域の中には、活動が休止に追い込まれ、再開に向けて不安を抱える団体もいます。また、一人ひとりの暮らしでは、つながりが薄くなることで孤立し、さらに困りごとが見えづらく、深刻化する場合もあります。

まずは、少人数やオンラインなども取り入れながら**話し合いの機会を作っていきましょう。**不安に思っていることや困っていることなどの気持ちや状況を共有することで、様々な課題や困りごとが我が事になり、多くの気づきが生まれます。地域や団体の現状を把握して、**住民同士、団体同士のつながりや思いを途切れないようにつなぎあわせ、**今できることは何かを考えていきましょう。



[いつもより距離をあけて]

[少人数で]

[オンラインで]

活動の目的の再確認をするチャンス

今まで行ってきた活動について、目的を確認します。活動が通常通りできないこの時期だからこそ、改めて**誰のために始めたのか、何のために行われているのか**を見つめなおし、目的を果たすためには何が必要か、検討してみましょう。

今、地域にある困りごとに変化は？

地域の課題や困りごとは変わっていないか、個々の活動はどうなっているか、状況を把握しましょう。また、地区社協に関わる人の思いを共有する機会をもつことも大切です。

〇見えづらくなっている困りごとの把握
〇団体の活動状況、どんなことに困っているか
〇地区社協に関わる人の思いの共有（活動を続けたい気持ち・感染への不安など）

地区社協としてできること

明らかにした活動の目的、課題や困りごとを踏まえて、地区社協に何が求められているか、つながりを絶やさないために何ができるか、地区社協としてどのような形で活動の応援ができるのかなどを検討していきます。

身近な地域での活動を応援するために

ネットワーク組織である地区社協は、様々な活動や団体を横につなげ、隣近所や自治会町内会など身近な助けあいの仕組みづくりを通じて、小さな活動のバックアップをしてきました。だからこそ、活動再開に向けた不安や悩み、工夫していることを集約し情報提供を行いながら、**活動者・団体と一緒に考え、応援する**ことができます。

団体間の情報共有ができる連絡会の開催や活動の工夫などのアドバイス、商店・施設等の専門性や得意分野を活かした新たなつながりづくり、感染症予防対策のための資金援助など、地区社協にできる様々な応援の方法について検討しましょう。

離れていてもつながりあえる活動を

困りごとを解決するための活動は、新たな困りごとに気づくことや支えあいの輪を広げるために、**これからの地域づくりにも必要不可欠です。**新たな生活様式を意識しながら、どうすれば不安が取り除けるのか、活動の目的を大事にできるのか、**離れていてもつながりあうために**、活動の在り方を検討・工夫してみましょう。

見守り（訪問活動など）

ご近所同士で行う見守りは、同じ住民の目線で行うため、「最近洗濯物が干されていないな」「何日も新聞がポストに溜まったままだな」などちょっとしたことにも気づくことができます。

また、会話や声掛けが孤独感や不安をやわらげ、安心感や心の豊かさにもつながります。頻繁に直接会えなくても、電話や手紙で気にかけていることを伝えるなど、これからもつながり続ける方法も考えてみましょう。

支えあい・生活支援（地区ボランティアセンター、配食活動など）

電球の交換や庭木の剪定、配食活動などの支えあいは、生活の場に入って行う活動だからこそ、制度では対応できない暮らしの困りごとを支え、変化にも気づけます。また、活動を通してご近所同士がつながることもできます。

触れ合う機会が多い活動だからこそ、内容を事前によく確認し、消毒などの感染症対策に留意しながら、お互いに無理のない範囲でご近所同士の助けあいを続けていきましょう。

交流（会食会、多世代交流イベント、サロンなど）

交流活動は、人々が出会う場であり、外出し相手の顔を見て会話をすることでつながり、お互いの変化にも気づくことができる、地域の居場所です。

少人数でも集まるなど工夫をしながら、人と人が距離を取りながらもつながりあえる方法を検討してみましょう。

住民の理解を広げ　困りごとを我が事に

地域の状況や困りごと等を集約して発信することは、一人ひとりの関心を高め、理解を広げることにつながります。同じ住民の言葉で伝えることで困りごとが我が事になり、誰も排除されることなくつながり続けることができます。

住民の暮らしの現状や困りごとを把握するために、外出の自粛や在宅ワークの広がりにより家にいる時間が多いこのタイミングで、様々な人にインターネットや手紙などを活用し、アプローチしてみましょう。

また、同じ住民である**地区社協だからこそ気づく生活に必要な情報**を、広報紙などで発信することもできます。

従来の大人数で行う講座などの開催は難しくなりますが、少人数やオンラインなどを活用し実施することで、普段参加できない住民に向けても理解を広げる機会にもつながります。

3 事例紹介

～集まることが難しいからこそ情報発信～

各サロンが開催していない状況で、地区社協の活動も停滞していました。地区社協役員会で地域の方に現状や情報を発信することが今できることの１つではないかとの意見が出たことで、つながりを途切れさせず**「みんなで今を乗り切ろう　ひとりじゃないよ！」**とメッセージを伝えていくために、広報活動に力をいれることとしました。

これまで年３回、全戸配布で発行してきた広報紙を２か月に１回発行としました。また、編集委員を２班に分けて交代で作成することで委員の負担を増やさないようにする工夫をしながら実施しています。

掲載する情報は、

① 今の地域活動の状況（サロンメンバーに電話かけや手紙を出している）

② サロンの再開予定情報

③ ご近所情報（お祭りなどの開催・中止状況、子ども会や自治会、シニアクラブ情報）

等を予定しています。

～子ども食堂を始めた目的の見直し・再確認～

これまで行ってきた「子ども食堂」が感染症拡大の影響で活動が休止となっていました。

その中で、担い手同士が今後について話し合う機会を設けました。立ち上げた時の思いを改めて振り返り、**「子どもの居場所」を作ることが第一目的であることを再確認**しました。目的の確認ができたことで、食事の提供はできなくても「居場所を再開しよう！」となりました。

今まで活用していた自治会館では密となるため使用できなくなってしまいましたが、エリア内の地域ケアプラザが場所の提供を申し出てくれました。感染対策のため、人数の制限や近くの公園を活用して待機場所を用意するなどの工夫も始めています。

人々の不安が大きくなるにつれ、一人ひとりの心の距離も離れつつあります。

大切にしてきた「支えあい」の歩みを再び進めていくため、お互いの不安な気持ちに気づき、寄り添うことが、今求められています。

必ずしも活動再開を前提にする必要はありません。不安な気持ちを共有し話し合うことから始めていけば、離れていてもつながり続けることができるのではないでしょうか。

地区社協だからこそできる「支えあい」と「つながりづくり」を市社協・区社協も共に進めていきたいと考えています。

発行日：令和２年８月
発行：社会福祉法人　横浜市社会福祉協議会　地域活動部地域福祉課　電話：０４５－２０１－８６１６